

12月第2週のメッセージ

■日時：2020年12月13日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

■聖書：マルコによる福音書第10章32節－52節

■讃美歌：265「天なる神には」

※1番のみ讃美。255「生けるものすべて」※1番のみ讃美。

お早うございます。

東京のコロナの感染拡大は、600人を超えるまでになりました。

お隣りの韓国でも感染拡大は収まらず、文在寅大統領が国民に謝罪をしたというニュースが流れて来ました。冷静に対処を続けて、感染対策に国際社会から高い評価を受けていたドイツのメルケル首相も、議会で初めて感情を露わにした演説を行い、国民に行動の自粛を呼びかけました。

医療崩壊のために失われる命があります。その一方で、職を失い、生活の困窮のために失われる命があります。今朝のNHKニュースで、日本国内ではこの間男性の32万人が職を失ったのに対して、女性は74万人と倍以上であることが報道されました。先週も申し上げましたが、コロナ禍は、社会のより弱い立場にある人々を追いつめています。

コロナの感染に怯え、さらに仕事を失うことへの不安が襲いかかる。まさに、コロナによ

って払わされる人類の代償がどれだけ大きなものであるかを思います。

そうした中で迎えようとしているクリスマスです。日本も世界も覆っているこの暗闇の中で、私たちはどこに光を見出して行けば良いのでしょうか？今日与えられた御言葉から、ご一緒に、少しでも確かな光を見出すことが出来ればと思います。

第10章32節から34節です。

32：一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び12人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。

3回目の受難予告の場面です。

エルサレム、そこは、イエス様が十字架に架けられる場所です。

「イエスは先頭に立って」とありますが、正確には、「弟子を導いて」あるいは「弟子を引き連れて」という意味です。12弟子以外にもイエス様についていた人々がいました。彼らは、イエス様のその決然と進まれる姿に「驚き」、すでに2度も受難の予告を聞かされていた12弟子は、いよいよその時が来たことを知り「恐れた」のです。

イエス様は12弟子を呼び寄せ、初めて、これから自分の身に起こることを話します。

33節、34節です。

33：「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。

34：異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は3日の後に復活する。

引き渡され、侮辱され、唾をかけられ、鞭打たれ、殺される。そして復活する。前の2回の受難の予告に比べ、語る内容は具体的でした。まるで、その出来事が始まったかのように。私は、このことを語るイエス様と、それを聞く弟子たちの心はどのようなものであったのかを思います。恐らく、恐怖と悲しみとで、心が張り裂けるような空気が漂（ただよ）っていたのではないかと思うのです。

その、重たい沈黙を破るかのように、二人の弟子が口を開きます。35節から37節です。

35：ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」

36：イエスが、「何をして欲しいのか」と言われると、

37：2人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの1人をあなたの右に、もう1人を左に座らせてください。」

37節にある右と言うのは、「あなたは私の右腕」とも言うように、イエス様の一番近くに置いて欲しい、又左と言うのも、同じく近くにと言う意味で、つまり、この二人は他の10人を差し置いて、イエス様の一番身近な存在として欲しいと願ったのです。

聖書学者の多くは、彼らのこの言葉から、エルサレム行きを決断したイエス様の苦しみを顧みず、功名心に囚われた何と愚かな2人なのかと批判しています。

しかし、私は少し違う思いがしています。

確かに、2人は、他の弟子たちに対し抜け駆けをしているかのようです。ただ、その言葉を言わせた理由は、この2人は本気でイエス様と共に受難を受けようと決意したと思うのです。単に、名を上げようとしたのではなく、イエス様の苦しみに、他の弟子の誰よりも早く共に与ろうとした、その思いがこの右と左に座らせてくださいとの言葉になったのだと思いました。それは38節39節の言葉と、その後の歴史的事実によっても明らかとなります。

38：イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」

39：彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。」

杯、洗礼、それは受難を意味していました。殺されることです。イエス様のその問いに対して、2人は「できます」と答えます。そして、事実、紀元44年、

イエス様の十字架からわずか14年後、ヤコブはヘロデ・アグリッパによって殉教の死を遂げています。使徒言行録12章2節、新共同訳聖書236頁にそのことをルカが記しています。1節から3節までを読みます。

1：そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、

2：ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。

3：そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロを捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。

この2人の願いに対し、イエス様は恐らく慈しむような眼差しを向けて言われました。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない」と。そして、40節から45節の言葉を続けます。

40：しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」

41：ほかの10人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。

42：そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。

43：しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、

44：いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。

45：人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。

仕える、僕となる。これは奴隷となることを意味しています。

奴隷が主人に仕えるように、あなたがたはすべての人の僕となりなさいと言うのです。

出来るでしょうか？

そして45節です。十字架。その意味がこの言葉によって明らかとなります。つまり、イエス様が架けられる十字架とは、罪の虜となっている私たちをその罪から解放するために、ご自分の命を身代金として差し出すためであると言われました。

今日の最後の場面に入ります。

46節から48節です。

46：一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。

47：ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。

48：多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。

目が見えないため、物乞いをして生きていたバルティマイの話です。

バルは子どもと言う意味ですから、バルティマイとは、ティマイの子と言う意味です。

彼は、自分の力で生きて行くことが出来ず、物乞い、即ち人々の慈悲に縋って生きていました。その彼が、イエス様がすぐ近くに来ていることを知って、叫び始めたのです。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と。

そこにいた人々は、彼を黙らせようとします。

すでにイエス様の心は、ご自分の使命を果たすためエルサレムに向かっている。そのようなお方を煩わせるなどという思いからでしょうか、叱りつけました。

しかし、バルティマイは黙るどころか、ますます叫び続けました。

そして、ついに、イエス様を立ち止まらせたのです。

49：イエスは立ち止まって、「あの男を呼んできなさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」

安心しなさいとは、勇気を出しなさい（田川建三）とも訳せます。

「勇気を出しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」

それまで自分の言葉を遮って、叱りつけていた人々が、突然「勇気を出しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」とバルティマイに言ったのです。

暗闇の中でもがき続け、繰り返し繰り返し襲って来る絶望と諦めの中で、しかし今、あのイエス様が来られた。そして私を呼んでいる。バルティマイは、その苦しみから、絶望から逃れられる人生の最後のチャンスだと思ったのかも知れません。「お呼びだ。」この言葉にこそ、彼は自分を覆っていた暗闇を突き破る一筋の光を見たのです。

50節、51節。

50：盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。

51：イエスは、「何をして欲しいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。

この「先生」という言葉は、35節のヤコブとヨハネが使った「先生」とは違った単語が使われています。ただ単なる敬称としての「先生」ではありません。バルティマイが発したその言葉には、自らの全身全霊を注ぎだして信頼し、信じているお方に呼びかけた言葉でした。目が見えず、他人の憐れみに縋って生

きることしか出来なかったこの私の人生の暗闇を、あなたは取り除いて下さる。そのことへの確信でした。

52 節。

5 2 a : そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

お気づきですか？

以前、同じように目の見えない人を癒した時、イエス様はその目に唾をつけ、両手をその

人の上に置いていました。しかし、バルティマイに対しては、ただ言葉だけです。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と。

そして、

5 2 b : 盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

のです。

マルコが記している最後のイエス様の癒しの場面です。この後の 11 章以降、癒しの場面は出てきません。先週触れませんでした。この話しの前の 10 章前半で、マルコは金持ちの男の話しを記しました。喜びの中にイエス様の後に従ったバルティマイとは反対に、彼は、悲しみながらイエス様のもとを立ち去ります。多くの財産を持ち、それを捨ててイエス様に従うことが出来なかったからです。

何が、この 2 人の人生を分けたのでしょうか？

人は、たとえ全てを失ったとしても、神様によって残されているものがあります。

神様によって造られ、命が与えられた私たちである限り、唯一残されているもの、それは信仰です。そして、バルティマイの信仰は、決然とエルサレムに向

かうイエス様を引き止める力がありません。マルコは、そのことを私たちに知らせています。

このバルティマイの喜びを、今日この日、私たちも又分かち合いたいと思います。

来週は、主イエス・キリストがお生まれになった日、クリスマスです。

誰のためにお生まれになったのでしょうか。

あなた一人のために、そして、この私のためにです。

祈りましょう。